

第6章 第6期(通常期)における勤務実態

1. 第6期の調査協力校の概況

第6期の調査期間は、平成18年11月20日(月)から平成18年12月17日(日)までの4週間である。

第6期において回答のあった小学校・中学校331校のうち、調査期間中に長期休業期を含んでいる学校は1校もなかった。そこでこれまでの第1期から第5期とは異なり、第6期については、調査協力校のデータを時期によって分割しないで分析を行った。つまり、第6期のデータはすべて通常期のデータである。

11月下旬から12月中旬というこの時期は、一般的に秋季の学校行事などがひと段落し、児童・生徒の冬季休業期を控え、学期終了に伴うさまざまな業務が増える時期であると考えられる。本章では、このような時期について報告を行うこととする。

2. 残業時間・持帰り時間および業務の内訳

(1) 全体的な残業時間・持帰り時間の実態

まず、第6期(通常期)の勤務日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-6-1)。

小学校では、残業時間量は平均で1時間36分、持帰り時間量は平均38分、これらを合わせた時間は平均2時間15分である。

中学校では、残業時間量は平均2時間08分、持帰り時間量は平均24分、これらを合わせた時間は平均2時間32分となっている。

また、小学校と中学校を比べてみると、勤務日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも32分長い。しかし、持帰り時間の平均は小学校のほうが14分長い。

次に、第6期(通常期)の休日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-6-2)。

小学校では、残業時間は平均で20分、持帰り時間は平均で1時間53分、これらを合わせた時間の平均は2時間13分である。休日の残業時間の中央値が0分であることからわかるように、小学校の教員は基本的には休日には学校で業務を行っていない(表2-6-2)。

中学校では、残業時間は平均1時間13分、持帰り時間は平均1時間51分、これらを合わせた時間の平均は3時間05分である。また、休日の残業時間の中央値と平均値に50分ほどのひらきがあり、持帰り時間の中央値と平均値には30分以上のひらきがあることからわかるように、中学校では残業や持帰り仕事をする人の間で時間量の差が大きい(表2-6-2)。これは後の図2-6-3や、図2-6-4からも確認できる。

小学校と中学校を比べてみると、休日における残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも50分ほど長い。持帰り時間については、小学校と中学校でほぼ同じである。小学校と中学校それぞれの残業時間・持帰り時間における業務内訳については、後の第3項で述べるが、中学校においては部活動を行っているために休日の残業時間が長くなると考えられる。

以上、第6期(通常期)の勤務日と休日を比べてまとめておこう。

小学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも1時間ほど長く(表2-6-1)、休日においては、持帰り時間の方が残業時間よりも1時間30分ほど長い(表2-6-2)。持帰り時間については、勤務日より休日の方が1時間15分長く、休日には学校で仕事をせず、自宅で持帰り仕事を行っている様子がうかがえる(表2-6-1、表2-6-2)。

中学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも1時間40分ほど長く(表2-6-1)、休日においては、持帰り時間は残業時間よりも40分ほど長い(表2-6-1、表2-6-2)。持帰り時間については、勤務日より休日の方が1時間30分ほど長く、休日でも自宅で持帰り仕事を行っている様子がうかがえる(表2-6-1、表2-6-2)。

表2-6-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	1時間36分 〔1時間26分〕(1.020)	38分 〔22分〕(0.748)	2時間15分 〔2時間06分〕(1.250)
中学校	2時間08分 〔2時間00分〕(1.152)	24分 〔10分〕(0.586)	2時間32分 〔2時間24分〕(1.276)
全体	1時間53分 〔1時間44分〕(1.123)	30分 〔14分〕(0.678)	2時間24分 〔2時間16分〕(1.272)

[]内は中央値、()内は標準偏差を示す。

表2-6-2 休日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	20分 〔0分〕(0.780)	1時間53分 〔1時間30分〕(1.743)	2時間13分 〔1時間56分〕(1.844)
中学校	1時間13分 〔26分〕(1.759)	1時間51分 〔1時間17分〕(1.960)	3時間05分 〔2時間43分〕(2.400)
全体	49分 〔0分〕(1.460)	1時間52分 〔1時間23分〕(1.862)	2時間41分 〔2時間16分〕(2.202)

[]内は中央値、()内は標準偏差を示す。

(2)個人単位でみた残業時間・持帰り時間の実態

前項では、第6期(通常期)の教員全体における平均の残業時間量・持帰り時間量に注目した。しかし、すべての教員が一様に残業や持帰り仕事を行っているわけではなく、これらの時間は、教員間での差が大きいと考えられる。

そこで、第6期(通常期)における教員一人あたりの平均残業時間量および平均持帰り時間量の分布をみたものが、図2-6-1から図2-6-4である。

以下、勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、それぞれ小学校と中学校の結果を検討していく。

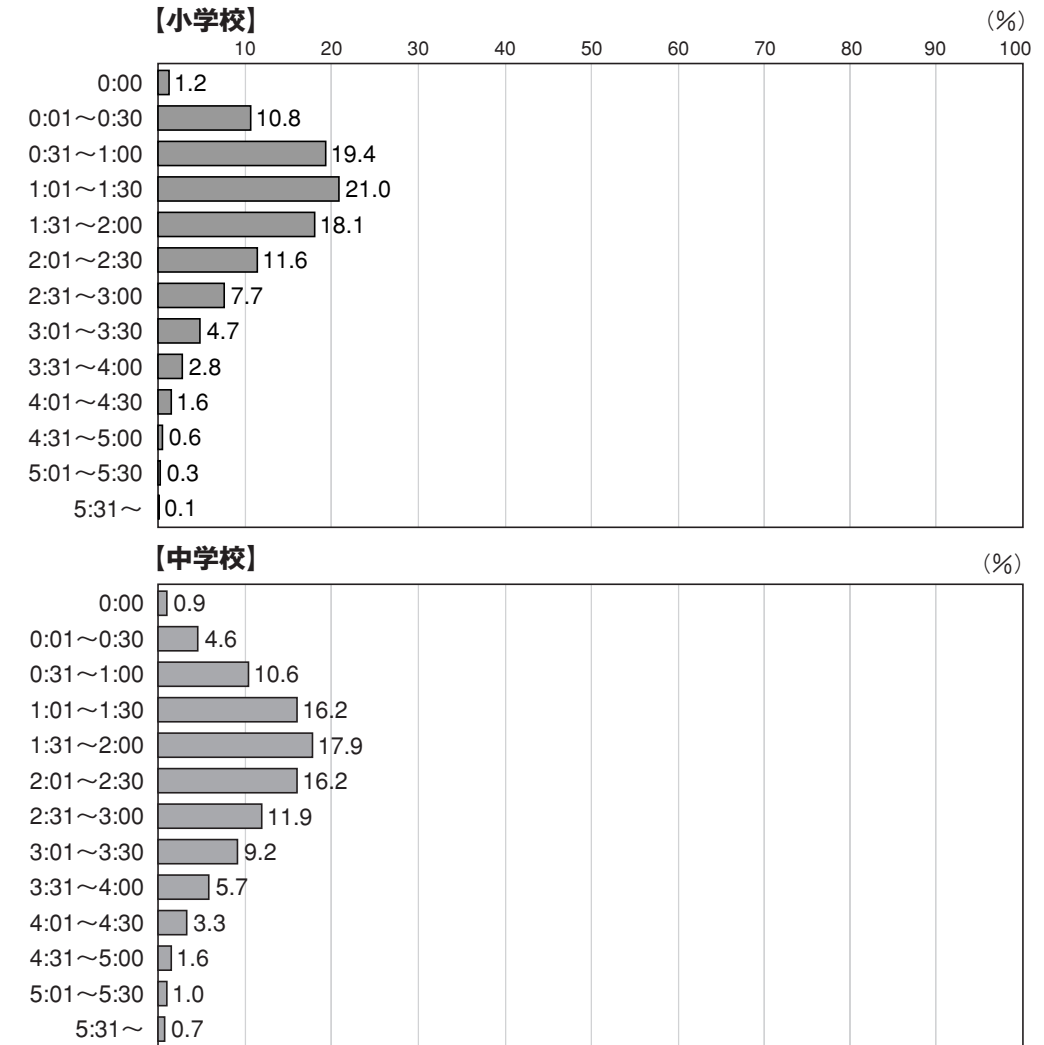
まず、第6期(通常期)の勤務日における平均残業時間量について検討しよう(図2-6-1)。

小学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が1.2%で、残業を行わない教員はごく少数である。平均残業時間が30分以下(0分をのぞく)は10.8%、31分～1時間以下は19.4%となっており、3割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。残業が1時間01分～2時間以下の教員はおよそ4割、残業が2時間01分～3時間以下の教員は2割、3時間を超える教員は1割である。

中学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が0.9%で、残業を行わない教員はごくわずかである。残業時間が30分以下(0分をのぞく)は4.6%、31分～1時間以下は10.6%となっており、約16%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。これに対して、平均残業時間が1時間01分～1時間30分以下の教員は16.2%、1時間31分～2時間以下の教員は17.9%、2時間01分～3時間以下の教員は28.1%、3時間を超える教員は2割ほどである。

以上から勤務日に残業を行わない教員は小学校においては1.2%、中学校においては0.9%となっており、残業を行う教員の多さが目立つことがわかる。しかし、残業時間については他の期に比べると必ずしも長くはなく、2時間以下(0分をのぞく)に小学校では7割、中学校では5割の教員が分布している。

図2-6-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01～1:30」は「1時間01分～1時間30分」。

次に、第6期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-6-2)。

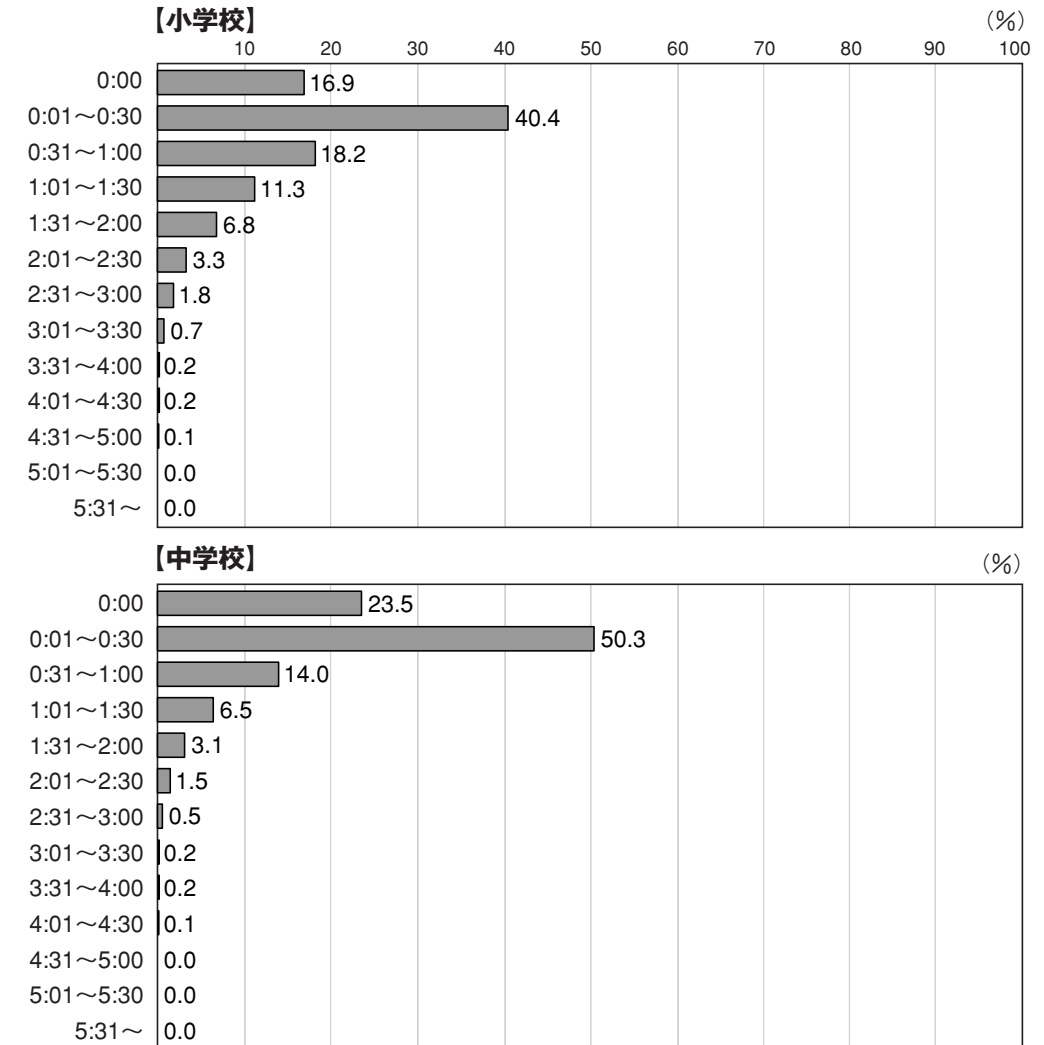
小学校の勤務日における平均持帰り時間の分布は、0分が16.9%で、持帰り仕事を行わない教員は2割弱である。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は40.4%、31分～1時間以下は18.2%であり、6割弱の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員は2割強である。

中学校の勤務日における平均持帰り時間の分布は、0分が23.5%で、持帰り仕事を行わない教員は2割強である。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は50.3%、31分～1時間以下は14.0%であり、6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員は1割強である。

以上、第6期(通常期)の勤務日について、勤務日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割弱、中学校では2割強いる。また、小学校・中学校いずれにおいても、6割前後の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。

第6期(通常期)の勤務日の残業時間と持帰り時間の実態についてまとめると、残業をまったく行っていない教員は小学校においては1.2%、中学校においては0.9%であり、残業を行う教員は多い。残業時間については、小学校では2時間以下(0分をのぞく)に7割の教員が分布しており、中学校では2時間以下(0分をのぞく)に5割の教員が分布している(図2-6-1)。持帰り仕事については、まったく行っていない教員は小学校では約17%、中学校では約24%であり、小学校・中学校いずれにおいても、6割前後の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている(図2-6-2)。

図2-6-2 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

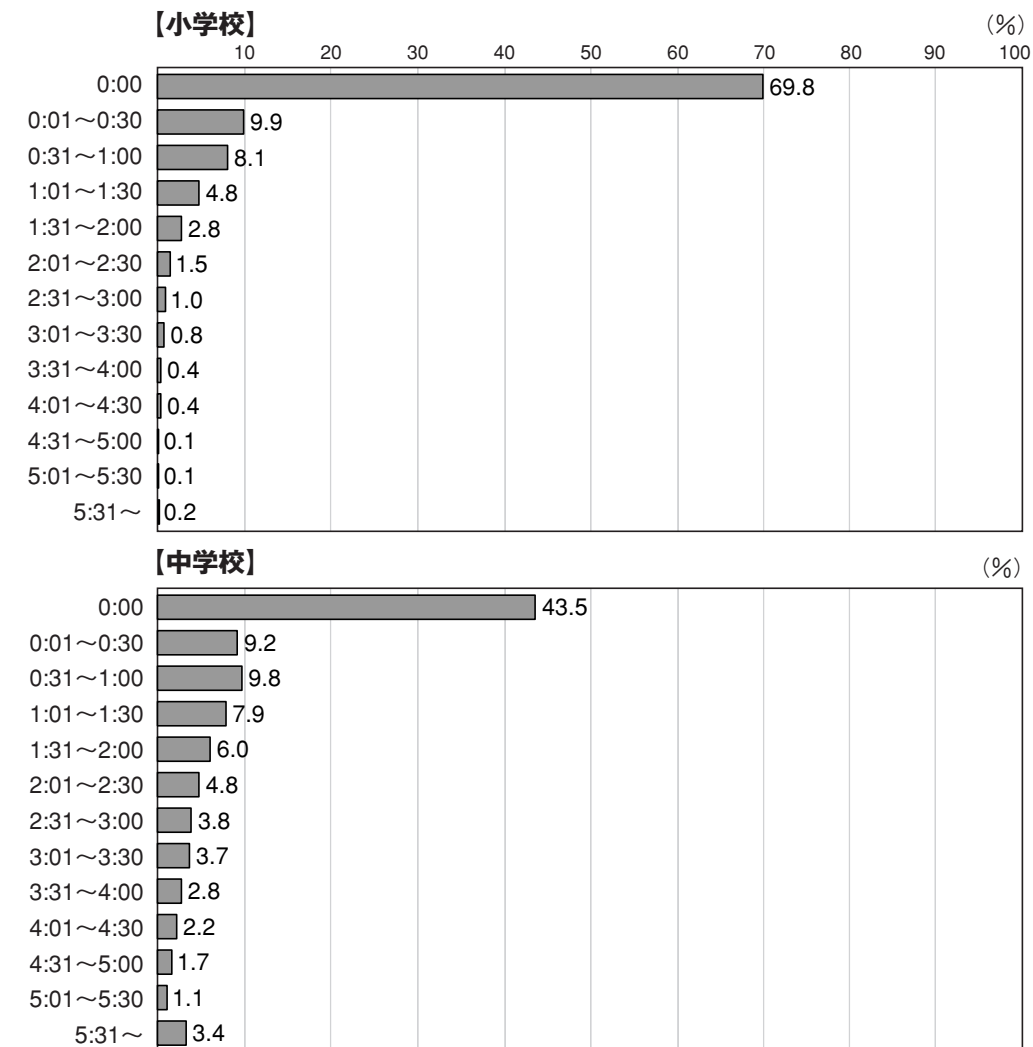
次に、第6期(通常期)の休日における平均残業時間量について検討しよう(図2-6-3)。

小学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が69.8%で、勤務日(図2-6-1)と比べると、休日にはほとんどの教員が学校に出勤することはないといえる。1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員はおよそ2割、1時間を超える残業を行う教員は1割強と、残業を行う教員も短い時間帯に集中している。

中学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が43.5%であり、残る5割強の教員が休日にも学校に出勤して残業を行っている。また、小学校に比べると休日に残業を行う教員が多い。残業時間については1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている教員が2割、1時間01分~2時間以下の教員が約14%、2時間01分~3時間以下の教員が1割弱、3時間を超える教員は15%ほど存在する。この時間に行っている業務としては部活動などが考えられるが、実際に中学校の教員が休日の残業時間にどのような業務を行っているのかは、後の第3項において検討を行う。

以上をまとめると、第6期(通常期)の休日における平均残業時間について、休日に残業を行わない教員は小学校では7割、中学校では4割強存在する。小学校では残業時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員がおよそ2割となっており、残業を行う教員についても、その時間は長くはない。中学校においては、残業時間の長さは教員間での差が大きく、1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている教員が2割ほどであるが、3時間を超える残業を行っている教員も15%ほど存在する。

図2-6-3 休日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

次に、第6期(通常期)の休日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-6-4)。

小学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が15.2%で、持帰り仕事を行わない教員は約15%である。これは、勤務日(図2-6-2)と大きな差はない。他方、休日でも8割強の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員によって差が大きい。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)の教員は12.1%、31分~1時間以下の教員は12.0%と、1時間以下(0分をのぞく)の教員が2割強である。1時間01分~2時間以下の教員は2割、2時間01分~3時間以下の教員は2割弱、3時間01分~4時間以下の教員が1割、4時間を超える教員が1割強いる。さらには5時間を超える持帰り仕事を行う教員も5%以上いる。

中学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が18.9%で、持帰り仕事を行わない教員はおよそ2割である。これは、勤務日(図2-6-2)と大きな差はない。他方、休日でも8割以上の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員によって差が大きい。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)の教員は13.9%、31分~1時間以下の教員は11.3%と、1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている教員が2割強である。1時間01分~2時間以下の教員は2割、2時間01分~3時間以下の教員は1割強、3時間01分~4時間以下の教員は1割弱、4時間を超える持帰り仕事を行っている教員は1割強存在する。中には5時間を超える持帰り仕事を行っている教員も約8%存在する。

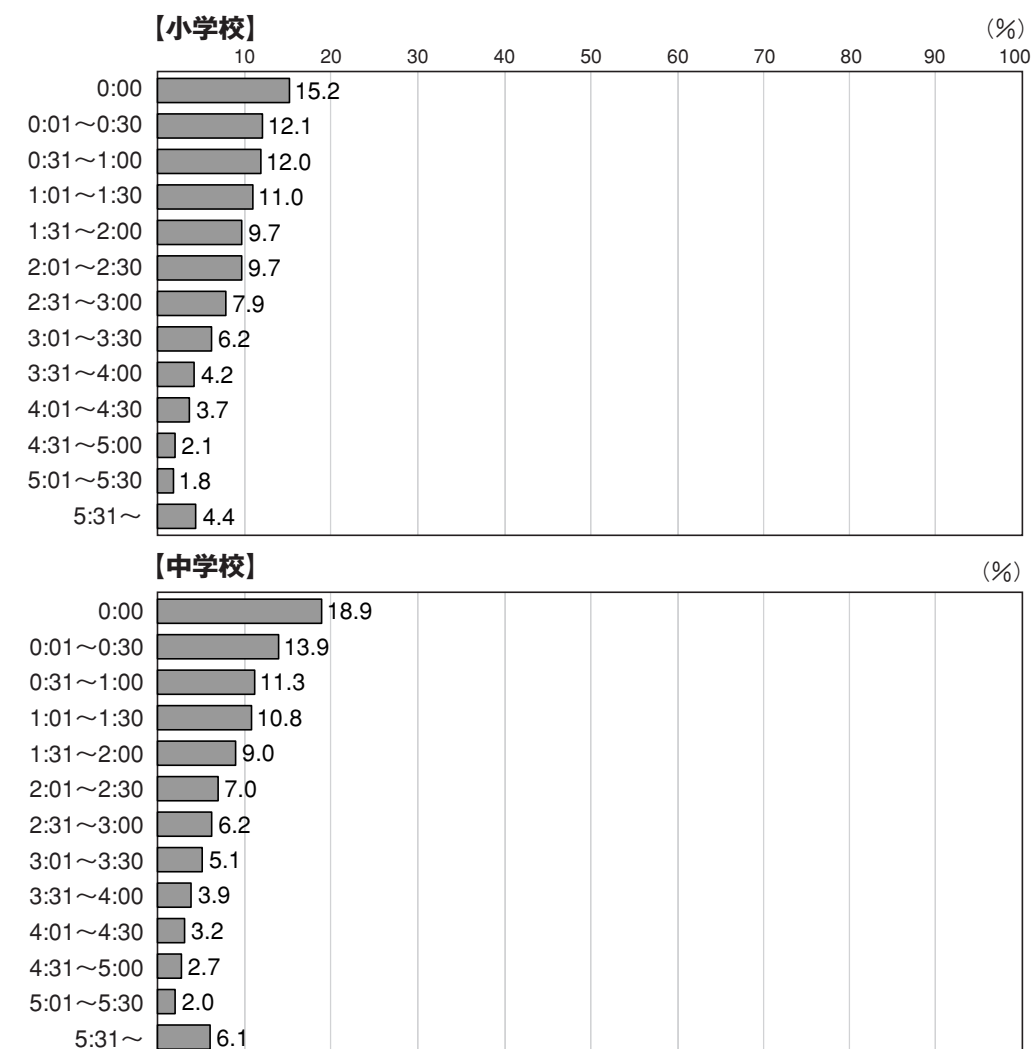
以上、第6期(通常期)の休日の持帰り時間について、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では約15%、中学校ではおよそ2割存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間の分布は幅広く、1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている教員が2割強、1時間01分~2時間以下の教員は2割、2時間01分~3時間以下の教員は1割強~2割弱、3時間を超える教員が2割強いる。

第6期(通常期)の休日の残業時間・持帰り時間の実態についてまとめると、残業時間については、休日に残業を行わない教員は小学校では7割、中学校では4割強存在する。残業を行う教員についても、1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員の割合が小学校・中学校いずれにおいてもおよそ2割で、残業時間は長くはない(図2-6-3)。持帰り時間については、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では約15%、中学校ではおよそ2割いる。持帰り仕事を行う教員においては、その時間は、小学校・中学校いずれにおいても幅広く分散しており、1時間以下(0分をのぞく)と持帰り時間が比較的短い教員と、持帰り時間が3時間を超える教員はほぼ同じ割合存在する(図2-6-4)。

以上から、次のことが指摘できる。

第6期(通常期)においては、勤務日に残業を行っていない教員は、小学校においては1.2%、中学校においては0.9%とごくわずかであることが特徴的である。しかし、残業時間については、他の期に比べると必ずしも長くはなく、2時間以下(0分をのぞく)に、小学校では7割、中学校では5割の教員が分布している(図2-6-1)。休日に残業を行わない教員は小学校では7割、中学校では4割強存在する。小学校では休日に残業を行う場合でも、その時間は必ずしも長くはない。中学校においては、残業時間の長さは教員間での差が大きい(図2-6-3)。持帰り仕事を行う教員の割合は、小学校・中学校のいずれにおいても、勤務日(図2-6-2)と休日(図2-6-4)ともにおよそ8割である。小学校・中学校いずれにおいても、勤務日の持帰り時間は6割前後が1時間以下(0分をのぞく)に集中し(図2-6-2)、休日の持帰り時間は1時間30分以下(0分をのぞく)に3割強の教員が分布している(図2-6-4)。

図2-6-4 休日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

(3) 残業時間・持帰り時間における業務内訳

前項では、第6期(通常期)における教員一人あたりの平均の残業時間量・持帰り時間量の分布について注目したが、本項ではこれらの時間にどのような業務を行っているのか、業務の内訳を検討する。

第6期(通常期)における勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校のそれぞれで業務の上位5種類の内訳を検討していこう。

まず、第6期(通常期)の勤務日について検討しよう(表2-6-3、表2-6-4)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校において最も長いのは、授業準備で22分である。2番目に長いのは成績処理で21分、つづいて事務・報告書作成が9分、学校経営が7分、会議・打合せが7分となっている。成績処理が上位に入っているのは、第6期(通常期)の時期的特徴であると考えられる。中学校において最も長いのは成績処理で31分である。2番目に長いのは授業準備で19分、つづいて会議・打合せで11分、事務・報告書作成11分、部活動・クラブ活動9分となっている。ここから、小学校・中学校ともに残業時間における業務内訳は、授業準備と事務的な業務が中心となっているといえる。特に成績処理が長いのは、冬季休業期を控えているためだと思われる。また、中学校では第1期から第5期には常に上位に入っていた部活動・クラブ活動の順位が低下している(表2-6-3)。これは、日没の早くなる冬季には他の調査時期に比べて部活動・クラブ活動の時間が短縮されることや、成績処理など他の業務の時間が長くなっていることが原因だと考えられる。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校において最も長いのは成績処理で16分である。2番目に長いのは授業準備で11分、つづいて学年・学級経営と事務・報告書作成2分、その他の校務1分となっている。中学校においても最も長いのは成績処理で10分である。2番目に長い業務は授業準備で5分、つづいて事務・報告書作成、その他の校務、学年・学級経営1分であり、事務的な業務が中心であるといえる(表2-6-4)。

表2-6-3 勤務日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	授業準備	22分	成績処理	31分	成績処理	26分
2	成績処理	21分	授業準備	19分	授業準備	21分
3	事務・報告書作成	9分	会議・打合せ	11分	事務・報告書作成	10分
4	学校経営	7分	事務・報告書作成	11分	会議・打合せ	9分
5	会議・打合せ	7分	部活動・クラブ活動	9分	学校経営	8分

表2-6-4 勤務日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	成績処理	16分	成績処理	10分	成績処理	13分
2	授業準備	11分	授業準備	5分	授業準備	7分
3	学年・学級経営	2分	事務・報告書作成	1分	事務・報告書作成	2分
4	事務・報告書作成	2分	その他の校務	1分	学年・学級経営	2分
5	その他の校務	1分	学年・学級経営	1分	その他の校務	1分

次に、第6期(通常期)の休日について検討しよう(表2-6-5、表2-6-6)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校では成績処理が最も長く5分、以下、授業準備が3分、保護者・PTA対応と事務・報告書作成が2分、その他の校務1分とつづく。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く46分、以下、成績処理10分、授業準備3分、事務・報告書作成、その他の校務2分とつづく(表2-6-5)。小学校・中学校いずれにおいても、成績処理、事務・報告書作成が上位に入っているのは、冬季休業期を控えた第6期(通常期)の時期的特徴であると考えられる。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校では成績処理が最も長く56分、つづいて授業準備が24分、事務・報告書作成が8分、学年・学級経営が6分、その他の校務が4分である。中学校でも成績処理が最も長く38分、つづいて部活動・クラブ活動が35分、授業準備が12分、事務・報告書作成が6分、その他の校務が4分である。成績処理、事務・報告書作成、学年・学級経営の時間の長さは、冬季休業期を控えているからだと考えられる(表2-6-6)。

表2-6-5 休日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	成績処理	5分	部活動・クラブ活動	46分	部活動・クラブ活動	25分
2	授業準備	3分	成績処理	10分	成績処理	7分
3	保護者・PTA対応	2分	授業準備	3分	授業準備	3分
4	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	2分
5	その他の校務	1分	その他の校務	2分	保護者・PTA対応	2分

表2-6-6 休日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	成績処理	56分	成績処理	38分	成績処理	46分
2	授業準備	24分	部活動・クラブ活動	35分	部活動・クラブ活動	19分
3	事務・報告書作成	8分	授業準備	12分	授業準備	18分
4	学年・学級経営	6分	事務・報告書作成	6分	事務・報告書作成	7分
5	その他の校務	4分	その他の校務	4分	学年・学級経営	4分

3. 属性別にみた残業時間・持帰り時間

前節では、第6期(通常期)における平均の残業時間量・持帰り時間量の全体像を検討した。

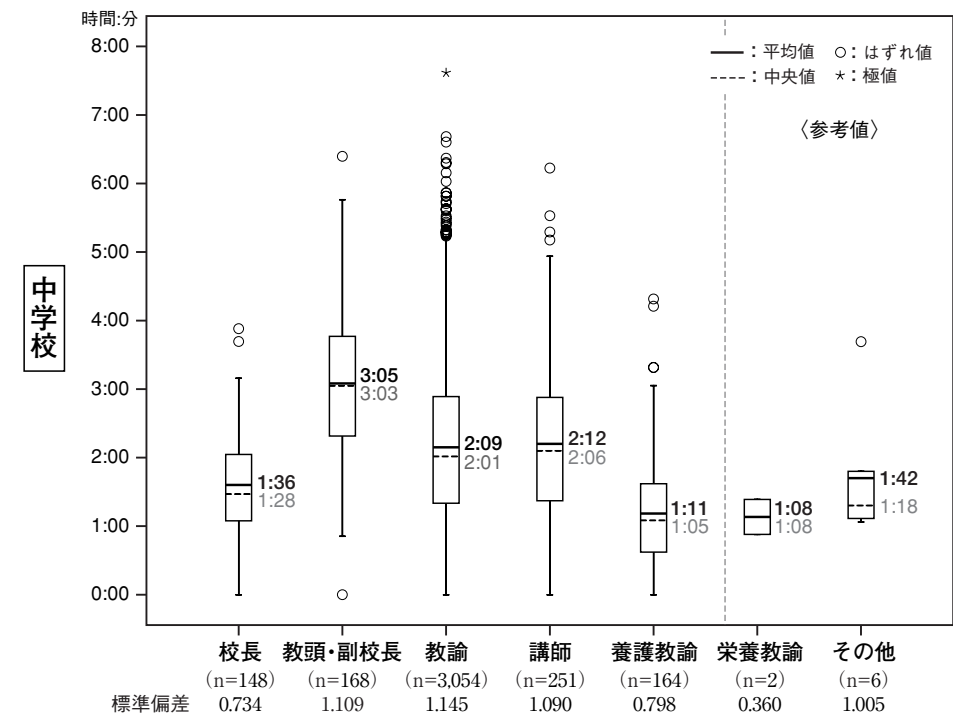
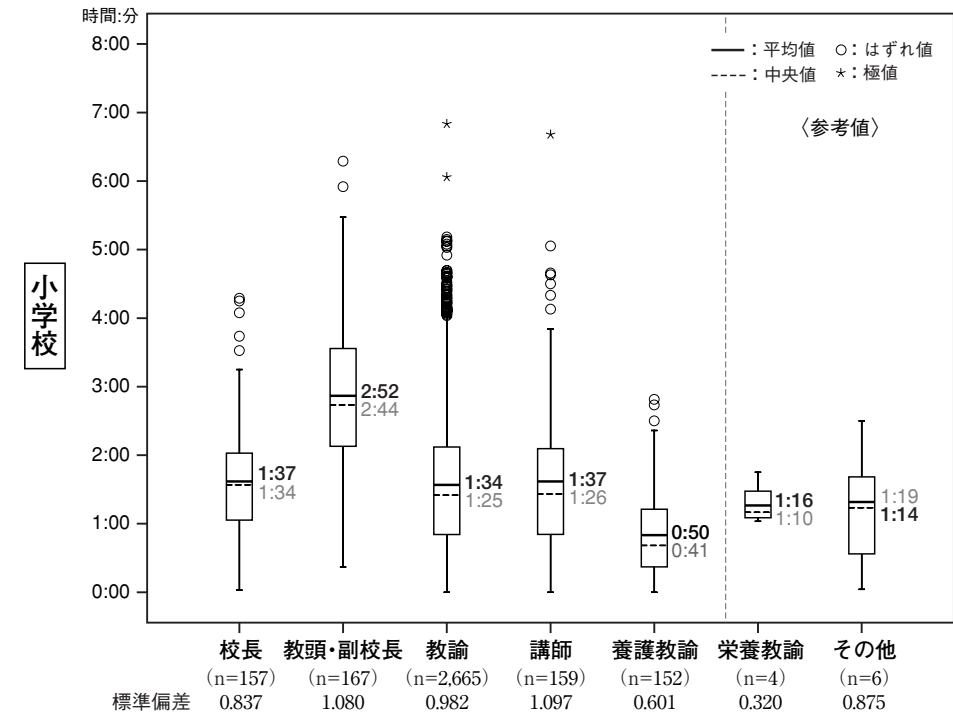
しかし、一人一人の残業時間量・持帰り時間量や、正規の勤務時間に処理できない業務を学校で行うのか、自宅で持帰り仕事として行うのかといった勤務実態は、教員の性別や職階、年齢などの属性によって異なると考えられる。

そこで本節では、特に勤務日に絞り、属性別(職階別、性別、年齢別)に残業時間量・持帰り時間量の実態を明らかにする。

まずは職階別に、平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校のそれぞれについて検討しよう。

第6期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は、図2-6-5の通り、小学校の教頭・副校長は2時間52分、中学校の教頭・副校長は3時間05分であり、他の職階に比べて大幅に長くなっている。その他の職階については、小学校では校長は1時間37分、教諭は1時間34分、講師は1時間37分、養護教諭は50分であり、養護教諭でやや短いほかは、職階による違いはほとんどない。中学校では校長は1時間36分、教諭は2時間09分、講師は2時間12分、養護教諭は1時間11分である。

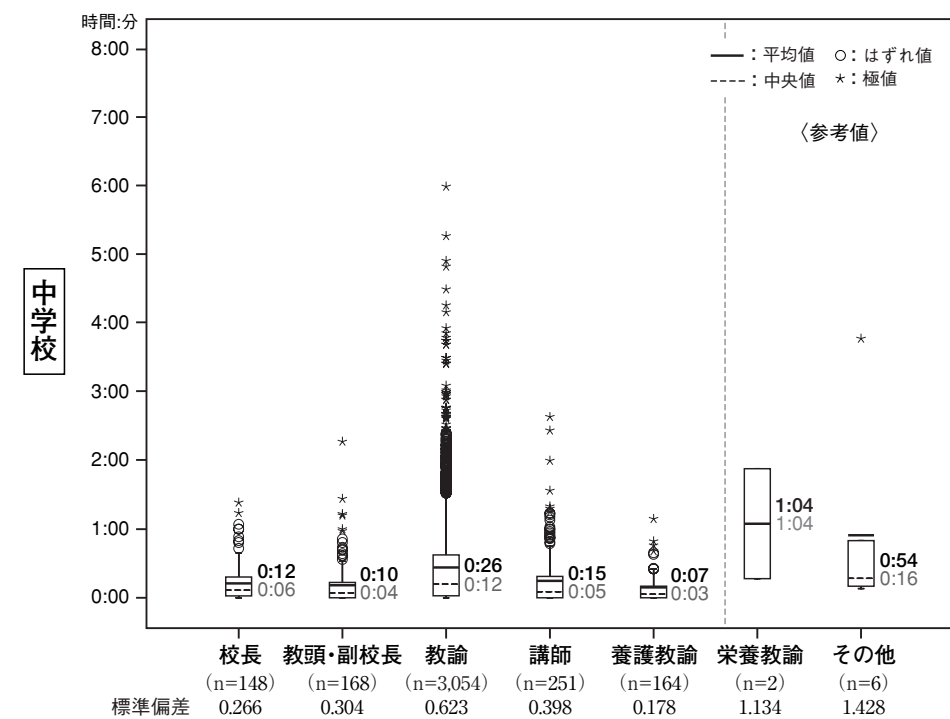
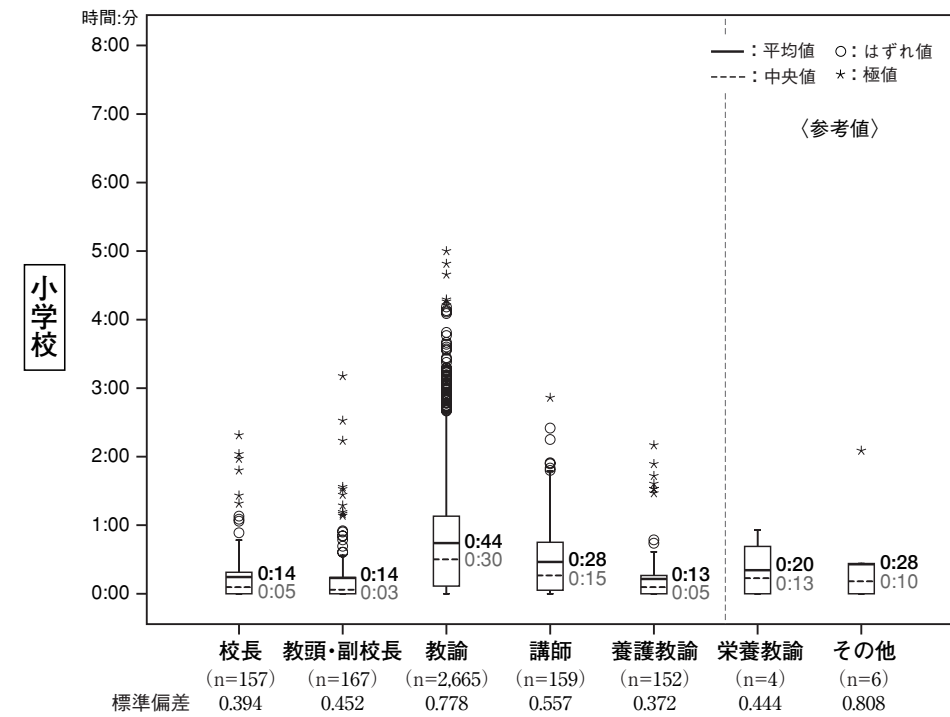
図2-6-5 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 職階別)



第6期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量は、図2-6-6のように、小学校・中学校ともに教諭で最も長くなっている。しかし、教諭をのぞく他の職階においては差はほとんどなく、小学校では、教諭44分に対して校長、教頭・副校長14分、講師28分、養護教諭13分である。中学校では、教諭26分に対して校長12分、教頭・副校長10分、講師15分、養護教諭7分である。

図2-6-5と図2-6-6の比較から、勤務日においては、学校では教頭・副校長が長く残業を行うが、自宅での持帰り仕事は教諭が長く、他の職階においては違いはあまりないといえる。

図2-6-6 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 職階別)



次に、性別ごとに平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校それぞれについて検討しよう。

第6期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は図2-6-7の通り、小学校・中学校ともに男性教員の方が女性教員よりも25分ほど長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 1時間52分、女性教員 1時間28分、中学校:男性教員 2時間19分、女性教員 1時間54分)。

これに対して平均持帰り時間量は図2-6-8の通り、小学校・中学校いずれにおいても男性教員よりも女性教員の方が長い、その差はあまりない(平均値は次の通り/小学校:男性教員 34分、女性教員 41分、中学校:男性教員 22分、女性教員 25分)。

図2-6-7 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 性別)

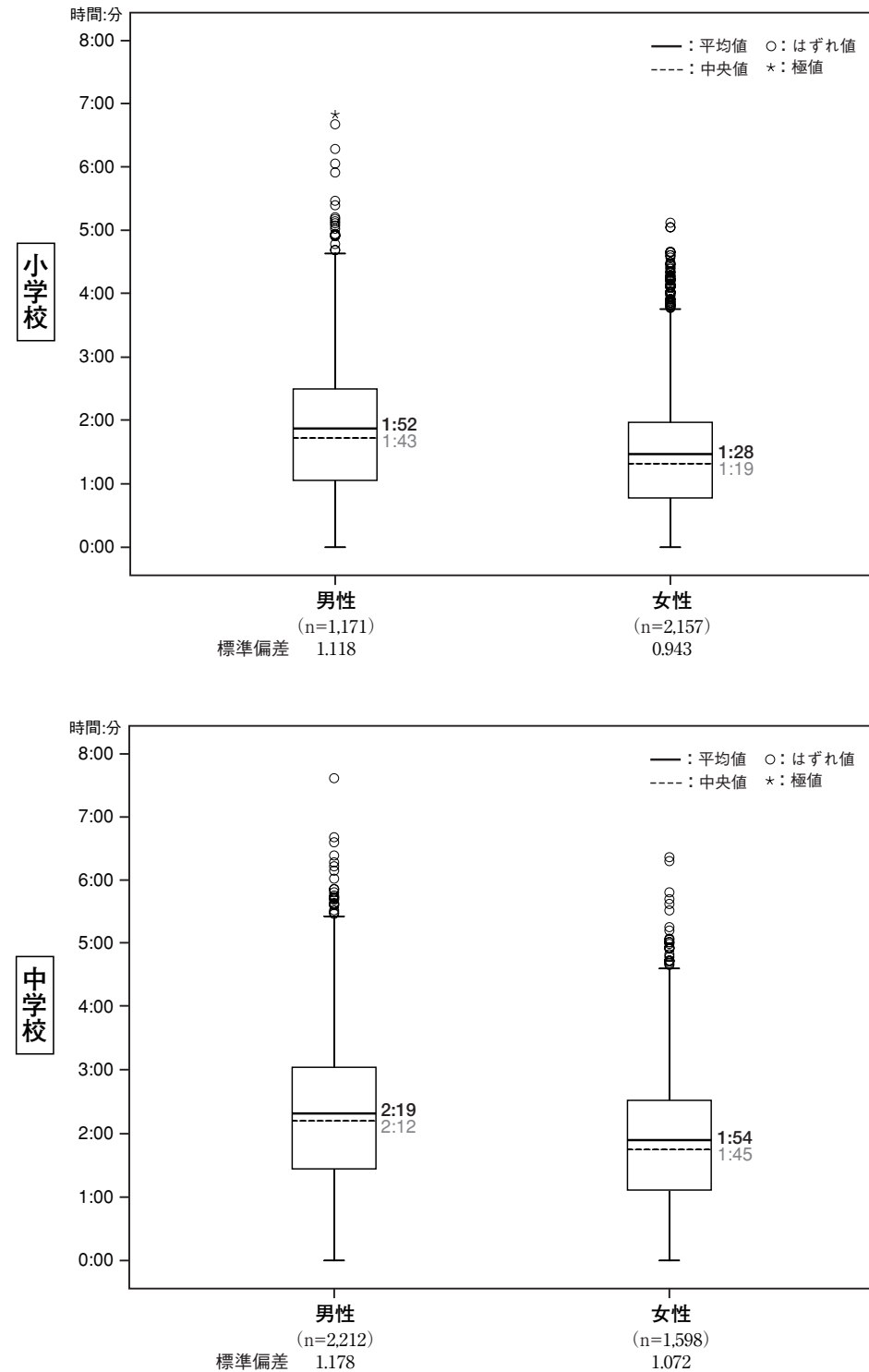
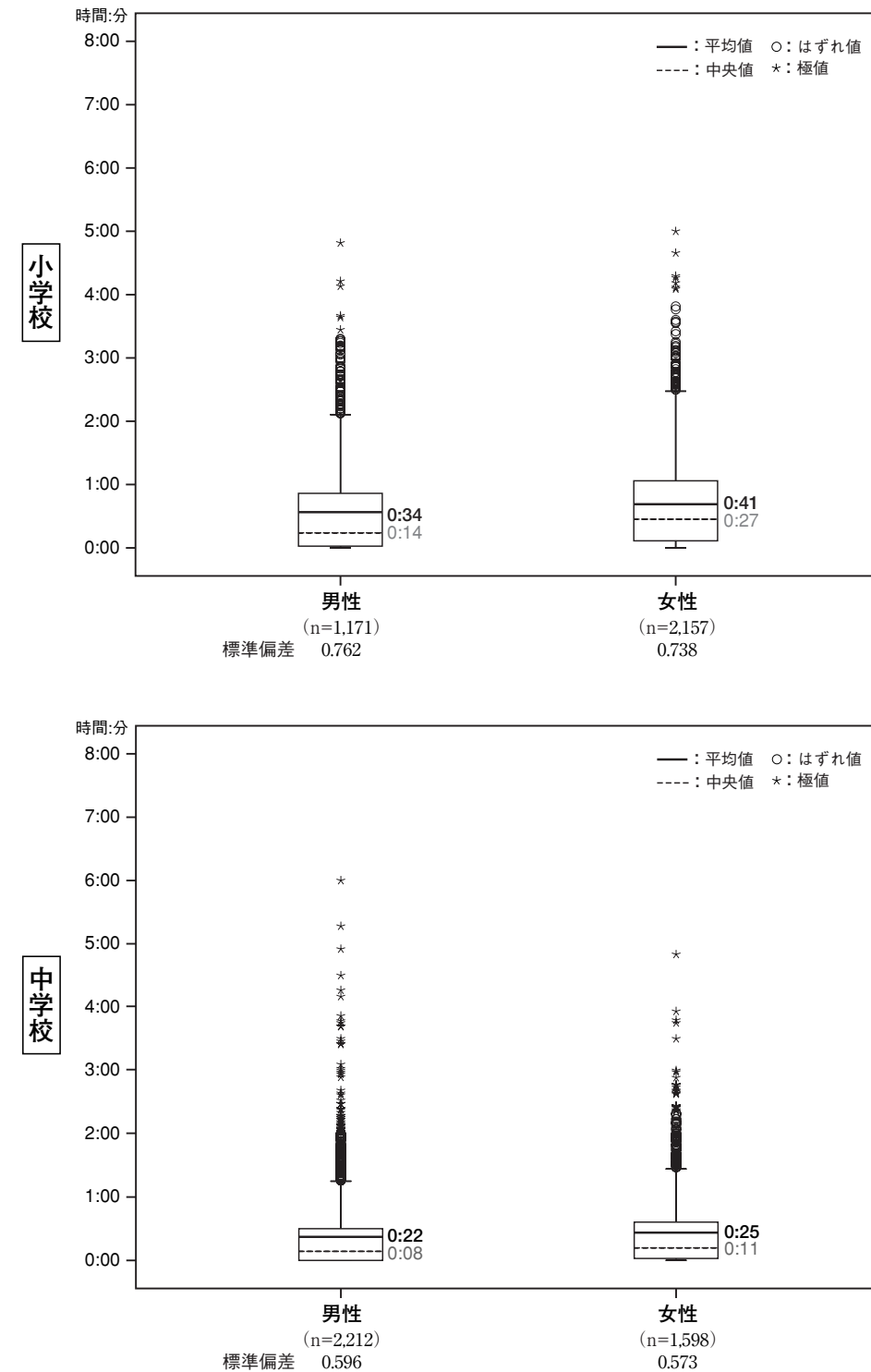


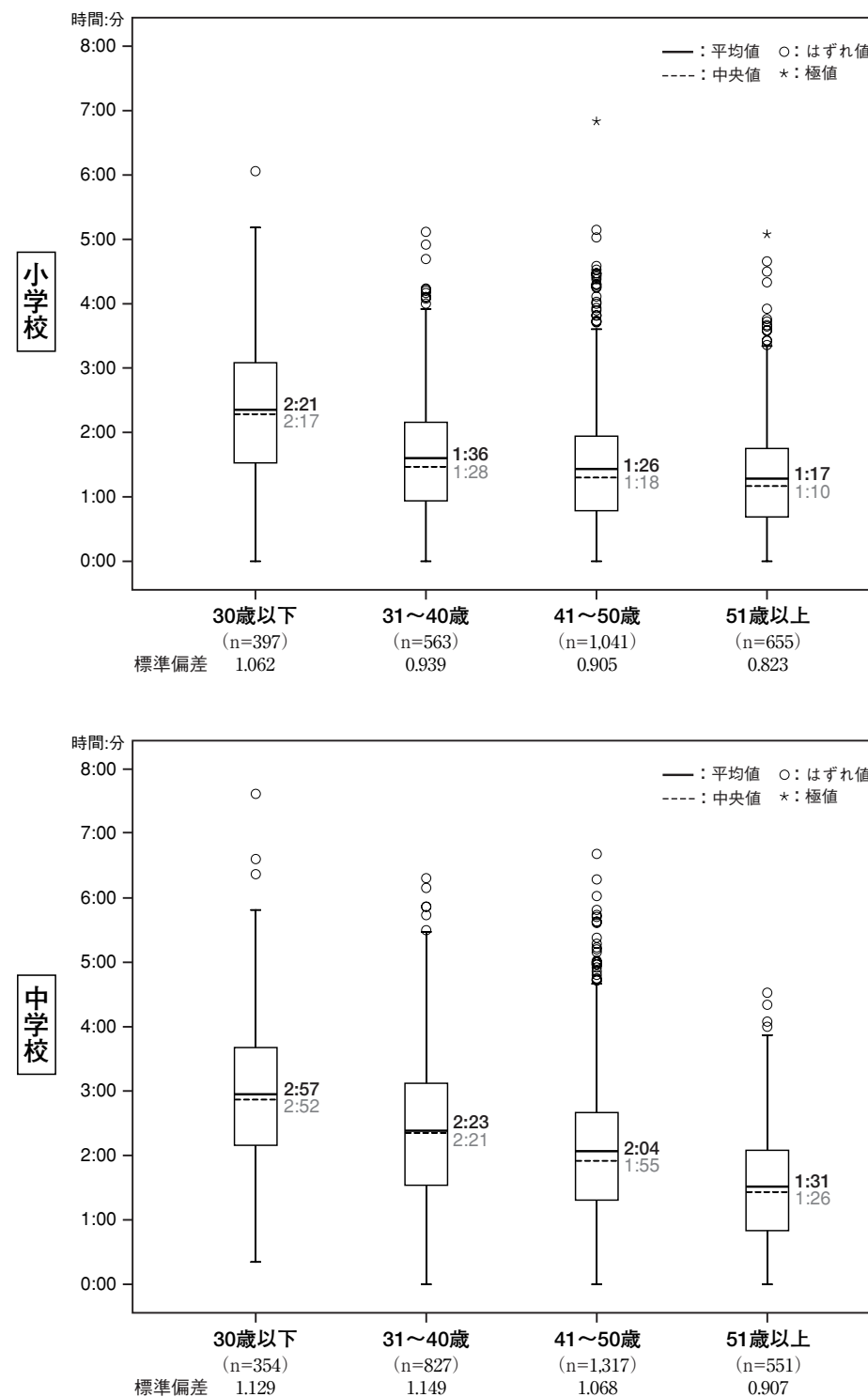
図2-6-8 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 性別)



最後に、年齢別に平均の残業時間量・持帰り時間量の実態を検討しよう。ただし、この場合、職階の影響をのぞく必要がある。たとえば51歳以上には管理職が多く、この年齢層で残業時間・持帰り時間が長い場合は、年齢の影響だけではなく職階の影響も考えられる。そこで、教諭のみを取り出し、教諭の年齢別で残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校について分析を行う。

第6期(通常期)の勤務日における教諭の平均残業時間量は、小学校・中学校ともに30歳以下で最も長く、小学校では2時間21分、中学校では2時間57分である(図2-6-9)。しかし、年齢層が上がるにつれて残業時間は減少する。小学校では31~40歳で1時間36分、41~50歳で1時間26分、51歳以上で1時間17分である。中学校では31~40歳で2時間23分、41~50歳で2時間04分、51歳以上で1時間31分である。ここから、年齢層の高い、いわゆるベテラン教諭になるほど平均残業時間が減少していくといえる。この原因は、経験を積むことによって授業などの準備時間が短縮されることや、若い年齢層ほど部活動などの業務が任せられることなどが考えられる。

図2-6-9 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



第6期(通常期)の勤務日における教諭の平均持帰り時間量は、小学校・中学校ともに41～50歳の教諭で最も長く、小学校では48分、中学校では29分である。小学校では30歳以下で35分、31～40歳で46分、51歳以上で41分である。中学校では30歳以下で21分、31～40歳で25分、51歳以上で26分である。小学校と中学校を比べると、全体的に小学校教諭の持帰り時間がやや長くなっている。

図2-6-10 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 教諭の年齢別)

